【前期終業式あいさつ】

補欠の補欠

校　長　　渡　邉　政　徳

この夏、全国高等学校野球選手権大会、すなわち甲子園大会の深紅の大優勝旗がついに「白河の関を越えた」というニュースを皆さんも耳にしたでしょう。これまで東北勢は最高でも準優勝に甘んじていましたが、この大会で仙台育英学園高校野球部が初めて優勝を果たしました。私も東北の人間の一人としてこの快挙をうれしく思います。

このチームを率いたのが須江航（すえわたる）監督です。データを十分に活用し、多くの選手に試合への出場機会を与えました。投手も全試合継投で、相手打線の目線を変え、疲労も分散しました。他の強豪校に比べ突出した選手がいない中で、卓越した采配ですべての選手の力を引き出し、優勝に導いたと言えると思います。

この全国優勝監督はおそらく高校時代も活躍した選手だったろうと思っていたところ、新聞の記事を読んで驚きました。高校生の頃は試合にはほとんど出られず、「補欠の補欠」であったというのです。実際、テレビに映し出された当時のベンチの写真には、制服を着た記録員としての姿がありました。大学でもマネージャーや学生コーチなど裏方としてチームを支えました。その後中学校で野球部の監督となり、指導力を開花させて全国制覇を果たし、現在の高校に監督として迎えられました。

須江監督は高校生の頃、メンバー入りするために何が足りないのかと悩み続けたと言います。だからこそ、指導では選手が目標をもてるようにデータを重視し、走塁やスイングスピードなどを細かく測定し、今の実力や目標値を丁寧に説明するのだそうです。そして、紅白試合などで誰にでもチャンスを与え、長打率や出塁率なども示します。自分の長所や短所が客観的な数字で示されることで、選手達は自分の目標や課題をより明確にできます。このような取組を通してチームの力を高めました。

「補欠の補欠」であった人が全国大会の優勝監督になったということは、我々に勇気を与えてくれます。高校時代に部活動などで活躍することは誰もが憧れることですが、すべての人がスター選手になれるわけではありません。しかし、平凡な選手が弛まぬ努力によって、後にスター選手に匹敵するような活躍をなし得るのです。人は人生の中で後になってから大きな進歩を遂げることことが多くあります。今部活動でレギュラーメンバーとして活躍している人も、レギュラーに手が届いていない人も、この後の活躍はこれからの努力次第と言えます。須江監督は自らの経験を通して、どうすればもっとよくなるかを問い続け、それを形にしようとしました。ある意味では補欠としての経験が、現在の活躍の糧であると言えるでしょう。

努力は実ります。チャンスは必ず巡って来ます。努力の末に手にするものは、当初思い描いていたのとは少し違うこともありますが、それは大きな宝物だと思います。課題意識をもって物事に取り組むこと、努力を継続すること、それらが未来を切り拓きます。部活動のレギュラーも補欠も、そして今それぞれの目標に向かって邁進している人も、互いに切磋琢磨して高め合っていくよう望みます。